

全日本実業団大会に出場した船場亜希=2002年2月、
八戸市長根リンク

北奥羽 アスリート列伝

The Lives of
Kitaouu Athlete

「北奥羽アスリート列伝」では、地元ゆかりの競技者の生きざまを紹介します。

船場

AKI
FUNABA

亜希

スピードスケート



'99アジア大会金メダル 「負けられないレース、で勝てた。 いい思い出」

氷都・八戸を巣立ってスピードスケート女子の名門・富士急行(山梨)入り。中長距離種目で粘り強い滑りを見せたのが、船場亜希(旧姓・成田)=おいらせ町出身。1999年2月には、アジア冬季大会(韓国)の3000メートルで頂点に立った。競技人生で初めて、唯一の国際大会のタイトル。「天候とかいろいろ運が向いたこともあるが、負けられないレースで勝てた。選手としていい思い出の一つです」

文・澤田 淳一

小学生時代は通年でバスケ、トボール、夏は水泳に熱中した。冬になると、学校裏の田んぼに張られた氷や町民リンクでスピードスケートに打ち込んだ。体を動かすことが大好きで、負けず嫌いの性格だった。

橋本選手に憧れて スピードの道へ

小学6年だった88年2月のこと。テレビの向こうの室内リンクで、力強い滑りを見せる日本人女性の姿に衝撃を受けた。カルガリー(カナダ)冬季五輪スピードスケート競技の橋本聖子選手(当時富士急行、東京五輪・パラリンピック組織委員会会長)だ。短距離から長距離までの全5種目で入賞したオールラウンダー。「こんな選手になりたい」。中学に進むと、迷わずスケート部入部を決めた。

競技を一つに絞り、激しい練習量をしたこともあって、青森県内では小学生時代は勝てなかった相手にも勝てるようになったが、全国大会では「予選通過がやっと」。高校は光星高に進み、筋力トレーニングも取り入れてレベルアップを図った。持ち前のスタミナと根性を武器に、県内中長距離では屈指の選手に成長。ただ、全国大会となると北海道、長野勢の壁にはね返され続けた。

高校卒業後も競技続行を考えていたが、全国タイトルがないままの年目のシーズンを終えると、厳しい現実と直面した。唯一、県内の実業団チームから誘いを受けたが「地元に残ると、周囲に甘えてしまっただけで成長できない」と断つたものの、国内実業団チームに手当たり次第お願

HISTORY

これまでの歩み

- 1986 小学4年で本格的にスピードスケートを始める
- 1995 富士急行入社
- 1996 全日本ジュニア選手権(長野・岡谷)女子総合優勝
- 1999 アジア冬季大会(韓国)女子3000メートル優勝。全日本選手権(釧路)女子総合3位
- 2000 ワールドカップ後半戦3大会、世界選手権(米国)出場
- 2002 現役引退

スケート漬けの富士急時代 「つらかったが、 それだけ競技に集中できた」

富士急行への挑戦

しても全て門前払いされた。残っていたのは、憧れの橋本らを擁する富士急行。国内女子トップチームだけに「常識的に考えて、無名の自分が無謀なのは自覚していた」。高校のコーチのついでで夏の陸上練習には参加できた。チームの練習には全くついていけなかった。それでも、チーム関係者に「どうしても入りたい」と熱い思いをぶつけると、カナダ・カルガリーでの秋合宿に来るよう伝えられた。

3年の秋、かすかな可能性を信じ、スケート靴を携えて単身、合宿地のカナダ・カルガリーに向かった。現地では驚かれたが、「せっかくなのだから」と氷上練習に参加する機会を与えられた。もちろん、トップ選手にはかなわず、半ば諦めの境地で帰国したが、チームから届いた通知は「内定」。後に関係者から聞いた話だと(カナダに来るよう)無理を言ったら諦めると思ったみたい。それでも「自分のどこかに、見どころ」を感じてもらえたのかな。運が良かった」。執念で次の道を切り開いた。3年のシーズンには団体(福島)は3000メートルで優勝。唯一の全国タイトルを手に地元を巣立った。

スケート漬けの日々

岡崎朋美、田畑真紀ら五輪メダル獲得を目指す精鋭がそろった富士急行は、高校時代と比べ物にならないほどの練習量。恋愛禁止、ピアス禁止など、年頃の女性にとって厳しいと思える約束事もあった。「正直、つらかったが、それだけ競技に集中できた」

96年2月の全日本ジュニア選手権(長野・岡谷)は4種目中2種目を制し、青森県出身女子初の総合優勝。それまで4度挑戦して一度も勝てなかった舞台上、実業団1季目でやっと自らの名を刻んだ。ただ、2季目以降は強力なライバルがそろった舞台では苦戦続き。特にエムウエーブ(長野)のような、滑るリンクでは「上位に食い込めなかった」。

悪条件の舞台で強さ

一方、スタミナ、粘り強さが試される屋外リンク、特に悪天候では強さを発揮した。98年12月の全日本選手権(長野)は総合6位。99年2月のアジア冬季大会(韓国)出場権を獲得した。

いざ本番。自身初の国際大会に「気分十分だったが、相手関係からも負けられない重圧はあった」。3000メートル



Aki Funaba

ふなば・あき 1976年9月生まれ。おいらせ町(旧百石町)出身。町立百石小・百石中・光星学院(現八戸学院光星)高卒。99年2月、アジア大会(韓国)女子3000メートル優勝、同1500メートル3位。2002年春、現役引退。13年4月から、八戸学院大スピードスケート部監督。

は強風吹き荒れる中で行われ、ライバル選手が終盤にタイムを落とす中、焦らず序盤から安定したラップを刻み続けた。「2003年大会開催地の青森から視察に来ていた関係者の声援も励みになった。日の丸を着けてつかんだ念願の金メダル。「集中してレースできた。最高の気分だった」

釧路(北海道)で行われた翌シーズンの全日本選手権(99年12月)も、時折、吹雪に見舞われる悪コンディションを、追い風に、総合3位に食い込んだ。ワールドカップ後半戦、世界選手権の日本代表に選出され、00年2月はカナダ、米国、イタリア、オランダと転戦。成績は振るわなかったが「世界のレベルを肌で感じられたのは誇りだ」。

01年12月、全日本選手権(長野)で振るわず、翌年2月のソルトレイクシティ冬季五輪(米国)の選手選考から漏れた。

「結果を出せないなら辞めるしかない」。実業団7季目。シーズン終了を待って「自分の全てをぶつけた」競技人生に区切りを付けた。

一時はスケートから完全に離れたが、結婚、出産を経て、今は指導者として後進の育成のためリンクに立つ。「意識が高い人たちの中で学んだことを、生まれ育った、お世話になった地元に戻元できれば」